

より親しみやすい 特技懇誌を目指して

巻・頭・言

令和2年度特許庁技術懇話会 副代表委員／編集委員長 石田 紀之



今年度の特技懇副代表委員／編集委員長の石田紀之と申します。今年度の編集委員会は、私と編集後記に掲載しております5名の中堅・若手審査官の総勢6名の体制で進めて参ります。また、本号が今年度編集委員会担当の第1号となります。これから1年間、どうぞよろしくお願いたします。

皆様、特技懇誌についてどのような印象をお持ちでしょうか。どの程度、特技懇誌を御覧になっているでしょうか。恥ずかしながら、私は、知り合いが執筆した記事や興味のある記事については目を通すものの、その後は大切なコレクションとして、棚にキレイに保管するといった状況でした。特技懇誌には、最新の施策や技術トピックなど、タイムリーで役に立つ記事が掲載されていることについては理解していたものの、内容をやや難解に感じ、少々気後れしておりました。

この度、編集委員長を務めさせていただくこととなりましたので、一念発起して、過去の記事を5年分ほど読み返してみることにしました。すると、なんとということでしょう。難解な記事はありませんでした。驚くほどにすんなりと読み進めることができたのです。いざ読み返してみると、文体自体は難解ではなく、読みやすいものであることに気付かされました。また、専門的な内容でも、まずは基礎知識から解説されており、その記事の内容は、その記事さえ読めば理解することができるようになっているものがほとんどでした。繰り返しますが、難解な記事なんて無かったです。なんとということでしょう。どうやら、いつの間にか「特技懇誌の記事は難解で気後れする」という勝手な先入観が形成されていただけのようです。はからずも先入観を自省する実に良い機会となりました。

さて、編集委員会において、今年度の特技懇誌の方針について議論を重ねて参りました。今年度は、これまでの方

向性、すなわち、知財に関連する話題や現在注目されている話題を掲載することで、読者の自己研さんや情報共有の一助を担うといった方向性を引き続き維持した上で、より親しみやすいものにしていくという方針で進めて参りたいと考えています。

そして、特技懇誌の親しみやすさを向上させるためには、本稿を御覧になっている皆様の御協力が不可欠です。具体的には、より多くの方から御寄稿をいただきたいと考えております。「知り合いが執筆した記事には俄然興味が湧く」といった声もありますところ、まずは多くの方に記事を執筆していただくことで、読者の皆様にとって特技懇誌がより身近な存在になれば幸いです。加えて、かねてより熱心に御覧いただいている読者の方にあっても、執筆者の多様化による、記事内容の幅の広がりを感じていただけたら嬉しいです。結果として、多くの方に御覧いただき、多くの読者の能力向上に貢献できれば、編集委員会として至上の喜びです。

「特集記事のような、専門的な内容の記事を自分が書くのはハードルが高い」と思われるかもしれませんが、所属する課室の取り組みといった専門的な内容はもちろんのこと、御自身の研究成果や感銘を受けた本の紹介といった、最近の特技懇誌にあまり掲載されていないような内容でも、御寄稿を受け付けております。アイデアがございましたら、お気軽に編集委員までお声がけください¹⁾。

末筆ではございますが、先行きが不透明な状況下にながら、執筆を快く引き受けていただいた執筆者の皆様へ厚く御礼を申し上げます。読者の皆様におかれましても、御協力を賜りますようお願いを申し上げて、本号の巻頭言とさせていただきます。

1) 編集計画の都合などにより、御寄稿を掲載できない場合もございます。まずはアイデアの段階で編集委員に御相談ください。